

平成29年度家庭教育「学びカフェ」推進事業検討会議（第2回） 議 事 概 要

1 会議の概要

- (1) 日 時 平成29年11月20日(月) 10:00~11:30
- (2) 場 所 北海道立道民活動センターかでの2・7 8階創作実習室
- (3) 出席者 検討会議構成員：7名、事務局：4名（別紙のとおり）
- (4) 次 第
 - ア 開会
 - イ 挨拶 北海道教育庁生涯学習推進局生涯学習課主幹 松 井 晃 之
 - ウ 説明 (ア) 平成29年度家庭教育「学びカフェ」推進事業の取組状況及び今後の方向性について
 - (イ) 平成30年度からの家庭教育事業について
 - (ウ) 家庭教育ナビゲーターハンドブックについて
 - (エ) 家庭教育「学びカフェ」推進事業検討会議の年間スケジュールについて
 - エ 議事 家庭教育「学びカフェ」推進事業の展開について
 - オ 閉会

2 発言要旨

【家庭教育「学びカフェ」推進事業の展開について】

- スキルアップ研修会に参加させてもらったが、コミュニケーションに関して深く考えたことのない方たちが多かった。若いお母さんたちとのギャップや感覚の違いも多いので、研修を受けていただくのは、それを考える良い機会になったのではないかと思う。
- 市町村のイベントにおいて、学びカフェのブースを作ってみた。「悩み・不安の相談コーナー」という看板ではなく、休憩スペースという形にし、より気軽に立ち寄ってもらえるよう工夫した。家庭教育ナビゲーターハンドブックを資料として何種類か置いたが、普段気になっていることがたくさん書いてあるということで、家庭教育ナビゲーター向けに置いておいた厚みのある資料を手にとっていた。昔はおじいちゃんおばあちゃんが近くにいるという状況だったけれど、今は核家族化して誰にも聞けず、インターネットで調べても出てこないなど、不安を抱えている方が多いと感じた。誰かに聞いてもらいたいだけという印象が多かったので、機会をたくさん作ることが大事だと感じている。年に何回かイベントがあるので、そのようなところで学びカフェをやっていたら良いと思い進めている。
- 乳幼児から学齢期までの学習機会の提供ということになると、やはり保健師との連携が大事だと思う。保健師は子どもたちのことを生まれたときから見て知っているのだから、あの子が少し心配だななどもよく分かっているし、健診のときに声をかけるなど、どのように関わっていったらよいかもよく分かっている。教育側だけではなく、保健福祉と教育の連携がなければ、乳幼児から学齢期までの長い学びを網の目のように支えていくのは難しいと感じた。
- 学ぼうとすることも大事だが、限定されてしまうので、お母さんたちが自然に知っていくのが良いと思うが、スタッフの研修も必要であり、色々なお母さんがいるので、これに対応するためには自分の引き出しをたくさん用意しておかないといけないといつも思っている。健診も保健師との繋がりも大事で、連携がますます大事になってくると思う。
- 小学校と中学校の校長先生と、地域の方との懇談の機会があり、先生方も転勤されるため子どもものが分からないということで、お互いに情報交換できたのがすごく良かった。意外と幼

稚園・保育園、小学校、中学校、高校の繋がりが切れている。その先生ごとに授業のやり方があるので、継続等を考えていく必要があると感じる。

- 今、子どもを抱いてみるということがあまりないので、場所作りをし、月に2回やっている。小学生だと色々な家庭のお子さん、例えば、学校では色々と問題のあるお子さんや、学校に行かないお子さんなどが来るので、誰でも入れてあげたいということで、障害の有無も関係なく過ごしているが、予算もないので、日々できるような環境になればよいと思っている。
- 学校と地域を考えたときに、両者が連携して子どもたちを育てていくというスタイルであるため、おもちゃを作って一緒に遊ぶだとか、男の子中心に妊婦セットを体験させて子育てや命について考えるというような学びをやっていたことがある。家庭教育を子育て中の方たちにするというのは当然大事であるが、将来子育てをする中学生に伝えるというのも、ひとつの家庭教育の形だと思っている。
- 今年もナビゲーターたちが2回カフェを行った。教育講演会「最近子どもと話していますか」ということで、グループを3つ4つ作り、ロールプレイング的に、こういう状況のときには子どもにどう返事するかというのを、講師の先生に入ってもらい行った。
- 場があるところに人を派遣する形の方が、たくさんの人に家庭教育を届けられると思っている。9月にイベントがあり、今年はたくさん人が来てくれたので、このようなイベントにおいてブースを作り、堅くないタイトルをつけて集まってくれただけやり方のほうが、切れ目のない家庭教育に繋がっていくと思う。
- 福祉部局との連携が絶対的に大事だということで、来月ナビゲーターの養成研修会を行うが、保健師にきていただいて、主旨の説明をすることを考えている。保健師との連携が必要だというのは、場のあるところにナビゲーターに行ってもらっても、本当に家庭教育が必要な家庭の方はそういう場に来てくれない、というのがあり、でも本当に必要なのは、そういう家庭に届けることであり、それが切れ目のない支援に繋がっていくので、そこを何とかしたいという思いを持ちながら、苦戦している。
- ナビゲーターを、一度認定したらしたままなのは良くないと思っている。個人情報保護もあるので登録者全員の情報は見られないが、きちんとしておかないと消滅してしまう気がする。今は施策として、国や道が進めている。亡くなってしまった、もう町から出てしまった人などは分かっているのか、届出はしているのか、きちんと把握していかないといけないと思う。
- 子育てサロンのような子どもに関する悩みを話す場ではなく、子育てをしている親の楽しむ場ということで活動している。スポーツだけでなく文化系も取り入れて、子育て中の方のみならず、色々な町民の方を対象に、リースづくりやピラティスなどを行っている。楽しみで発散しながら、子どもの話をしたり、色々な年代の方とコミュニケーションを取るという方向で進めている。他の場所で行っているから自分の場所でも行ってみて上手くいくかと言うと、そうでもない部分もあり、その町流にアレンジして、その町の方と話しながらどんなやり方が合うか考えながら行っていこうと思う。その町に合わせる柔軟さが必要である。
- 市町村により温度差があるように感じる。家庭教育支援の質をより高めたり、広げたりするためにどうするかが一番大事だと、この半年で感じた。現在の取組みが3年で終わるときに、名称が変わってしまい、また新たなものになってしまうのが、もったいないと感じている。
- 保健福祉とも関係をもちたいと思っており、研修会の案内を振興局の方を通して、保健福祉の方から案内をしてもらい、支援センターからも何人か入っていただいた。
- 教育委員会は幼児期から就学期までを対象としているが、保健師は赤ちゃんがお腹にいるときからマタニティーに関わっている。子育てサロンでも2年くらい前から、マタニティーの方、母子手帳をもらいに来た方に情報を流してほしいとお願いして、この頃少し来るようになった。
- 学校に出張して、子育てサロンに来ている親子に協力してもらい、生徒たちは赤ちゃんを抱っこしてみる、という活動をしている。産まれてから初めて赤ちゃんを抱いてみるのではなく、その前に1回でも触らせてあげたいということで行っている。マタニティーも自分の子どもを

産んで初めて赤ちゃんに触ると不安になる方があまりにも多くて、最近このような取組を行っているが、マタニティーの方が子育てサロンに来るようになった。そのような方向けの内容もハンドブックにより提供できたらよいと思う。

○今あるイベントの中でも敷居やハードルを低くしたカフェのような話せる場づくりというのはすごく大事なことだと思う。シングルマザーやシングルファザーのようにそういう場に出てくる時間さえないというような方は、何かメリットがないと来ないという話が、一番はじめの会議で出てきて、すごく印象的だった。

○ファミリーサポートの電話担当をしており、子どもを預かってほしいという依頼の電話がくるが、信頼関係ができてくると、夜に悩み相談の電話が来たり、話を聞いていくと託児依頼というよりは悩みの電話だったと分かることがある。2年前に助成制度が始まったが、ひとり親家庭や生活保護、非課税、障害を持っているお子さんの家庭に対するもので、利用しやすくなり、お金の面だけでなく、敷居が下がり距離感も近づいた。向こうにもメリットがあるし、私たちも関わるができる。信頼関係ができたときに、困っていることや悩みなどを言ってくれるので、情報発信したり、どう思っているか聞くこともできる。ファミリーサポートは学びカフェの取組みで活かせる場だと、助成制度が始まってからこの2年くらい思っている。1対1だと、託児依頼をするついでに少し悩みについて聞かれることもあり、内容によってはアウトリーチで訪問型の方に繋げていくこともある。